

P1-072

大学病院小児科における心理士活動の特徴

上田 美弥¹、堂谷 知香子¹、佐藤 敦志¹、犬塚 亮¹、
樋渡 光輝¹、平田 陽一郎¹、笠井 清登²、
佐竹 和代³、本田 京子³、塚野 和代³、岡 明¹

¹東京大学医学部附属病院 小児科

²東京大学医学部附属病院 精神神経科

³東京大学医学部附属病院 看護部

【背景】

当院の小児科では、2名の臨床心理士が心理業務を行っており、主な活動は外来および病棟での心理検査や心理面談である。小児科における臨床心理士の活動は、病気の治療を最優先とする中で行うため、明確な面接の構造を作ることが困難である。そのため、確立された枠組みの中で進めていく従来の対応とは異なり、柔軟に介入していくことが求められる。また、小児科は、発達障害や小児血液疾患、先天性心疾患など、幅広い内科的疾患患者を対象としており、心理士に求められる支援の内容は様々で、患児の年齢、介入の目的によっても支援の方法は大きく異なる。そのため、臨床心理士は、個々のケースに応じて対応を工夫し、他職種と連携し、アセスメントをしながら関わっていくことが重要となる。時には、患児だけでなく家族に介入していくことも必要となる。

【目的】

大学病院小児科における臨床心理士活動の特徴と課題を明らかにすること

【方法】

2018年4月から2019年3月における、当院小児科臨床心理士の心理検査および心理面談記録を、電子カルテを用いて後方視的に検討した。発表に関しては当院倫理委員会の承認を得た。

【結果】

調査期間中におこなった心理検査は100例、心理面談は33例であった。心理面談の対象となった患者のうち、小児血液疾患が最も多く、心疾患、神経疾患がそれに続いた。外来での心理検査では、発達障害がもっとも多かったが、血液疾患や心疾患に合併したものも比較的多く含まれていた。また、大学病院の特徴として、二分脊椎外来、成人移行期支援外来といった専門外来のチームに所属をし心理的側面からの助言を求められる場面も多く経験した。また、NICU・GCU・PICUといった集中治療病棟では、患者本人ではなくさまざまな不安を抱える患者家族の心理的サポートが求められる場面が多かった。

【考察】

大学病院での臨床心理士の活動を振り返ると、1.さまざまな疾患背景に対して多面的な心理アセスメントが必要であること 2.特に長期入院を余儀なくされる小児血液疾患患者などでは、家族も含めたサポートが重要となること 3.多くの専門職の間でこまめなコミュニケーションをはかり、協同して活動することが重要であること などが特徴的であると考えられた。今後は、さらに退院後の患者の長期フォローアップなど、大学病院特有の小児慢性疾患患者の特徴に合わせた臨床心理士の活動の幅を広げていきたいと考える。